



SDGs, Diversity and Inclusion

●
黒田玲子 Reiko KURODA

東京理科大学 総合研究院



変わったタイトルと思われるかもしれないが、アカデミア、インダストリー、ビジネス、政府機関、NGO等にかかわらず、我々すべてが、このキーワードをよく理解して率先して取り組むことがこれからますます必要になるのではないかと考えている。SDGs (Sustainable Development Goals) は2105年9月25日の国連総会で全会一致で採択された『持続可能な開発のための2030アジェンダ』と題する文書で示された、2030年までに世界が協力して達成する17の目標とその下の合計169のターゲットから成る。そのポイントは、1. No Poverty, 2. Zero Hunger, 3. Good Health and Well-Being, 4. Quality Education, 5. Gender Equality, 6. Clean Water and Sanitation, 7. Affordable and Clean Energy, 8. Decent Work and Economic Growth, 9. Industry, Innovation and Infrastructure, 10. Reduced Inequalities, 11. Sustainable Cities and Communities, 12. Responsible Consumption and Production, 13. Climate Action, 14. Life below Water, 15. Life on Land, 16. Peace, Justice and Strong Institutions, 17. Partnerships for the Goalsである。人権と生活の質、地球環境・生態系の保全とそのための活動・社会構造等多岐にわたる。2015年に終了したMDGs (ミレニアム開発目標) との違いは、開発担当機関だけではないあらゆる人々の目標であり、「何をすべきか」という行動目標ではなく、2030年に世界が「どういう状態になっていなければいけないか」という到達目標を示したことである。

その達成と関連しているのが、ダイバーシティ、さらに、インクルージョンであろう。ダイバーシティという言葉は生物多様性で知られているが、人間社会の中の多様性でもある。インクルージョンとは、年齢、性別、国籍、宗教、障害の有無、ライフスタイル、仕事歴等の多様性を包摂し、尊重し、認め合い、共に活躍・成長する社会の構築を目指すものである。“Leave no one behind” (誰一人取り残さない) というSDGsの精神につながるものである。我が国の取り組みはどうだろうか？ 年齢や性別、国籍などいまだ本質を見ず杓子定規的やり方が色濃く残ってはいないだろうか？ SDGsをビジネスチャンスとだけ捉えていないだろうか？ 筆者はICSU (世界科学会議) の副会長や国連事務総長 (潘基文当時) の科学諮問委員を仰せつかり、微力ではあるがFuture Earth (持続可能な地球社会の実現を目指す国際協働研究プラットフォーム) やSDGsの立ち上げに若干関与した。世界の潮流の中で、日本各界がこれらを身近な問題として捉え、SDGs達成に向けて一層、変革・飛躍してくれることを心から期待している。

© 2018 The Chemical Society of Japan